

小特集

六角氏式目と永源寺文書の研究 (一)

小特集「六角氏式目と永源寺文書の研究」について

東 島 誠

目 次

小特集「六角氏式目と永源寺文書の研究」について (東島 誠)
 永源寺文書ならびに永源寺の文化財——現状と展望 (森 慈尋)

【研究ノート】

濱野未来 「和南忠長・小倉実隆連署書状案」再考——永源寺文書における六角氏「新式目」をめぐる

森下裕真 一つの北条家朱印状写をめぐる——岩櫃城成立期小考
 佐野啓生 寛文・延宝期における近江国愛知郡西ヶ峯相論をめぐる相論の基礎的考察——近世における中世文書利用の様相

【史料紹介】

米田 豪 「伏状」とは何か?——永正六年七月 永源寺分殿村井田井料伏状の検討を通じて

【解題と目録】

濱野未来 中世史における永源寺と永源寺文書 付 長櫃中世文書解題
 永源寺文書中世文書目録 (一)

凡例

目録① 長櫃中世文書 目録② 函二三四
 目録③ 函二四六 目録④ 函二九〇

この小特集は、立命館大学大学院文学研究科において東島が担当する、「日本中世史特殊問題 (LBクラス)」(通称、院ゼミ) の、調査研究報告である。本誌上で、二、三回程度の方載を予定している。

院ゼミでは、二〇一九年度までは、西園寺家の古記録である「管見記」のコロナタイプ版を底本とした輪読を行っていたが、COVID-19に直面した二〇二〇年度春セメスターからは、六角氏式目の輪読に転じた。途中、東島が学外研究で不在となった一年間を除き、七セメスター、じつに二〇〇時間以上をかけて第六二条まで読み進めてきており、本号が発行される二〇二四年度秋セメスターには、なんとか最終条に到達できるのではないかと予測している。

では、なぜいま、六角氏式目なのか。拙著『幕府』とは何か——武家政権の正当性』(NHKブックス、二〇二三年) の「戦国法と『法の支配』——マグナ・カルタは可能か」の節でも述べたとおり、二〇一〇年代中葉以降、近代立憲主義と逆行する政治が、日本社会で急速に前景化することによって、法は権力を拘束する、という「法の支

「配」の重要性に、あらためて光が当てられるようになったからである。折しも二〇一五年、イングランド王ジョンの恣意・専横を抑制するマグナ・カルタ制定から八〇〇周年を迎え、その記念の年の講演に基づき成稿されたのが、水林彪「マグナ・カルタと六角氏式目」(『早稲田法学』九二巻三号、二〇一七年)であった。二〇二〇年代に入っても、この問題は、引きつづき未解決の課題でありつづけている。

もちろん、六角氏式目と「法の支配」という問題自体は、一九六〇年代の、勝俣鎮夫による戦国法研究以来、心得ある歴史学の底流には、しっかりと存在していたのだが、その後は、水林論文が登場するまでの数十年にわたって、問題関心の停滞した時期が長くあった。その一方で、昨今の中世史研究のますますの細密化のなかで、六角氏自体の研究もまた、村井祐樹、新谷和之らによって、確実に進展を見せるに至っていることもまた、事実である。したがって、いま六角氏式目を研究することは、この二つの研究動向を二つながらに踏まえ、新たな歴史像を創造する営みにほかならない。

こうした意気込みゆえに、テキストの読みは、回を重ねるごとに濃密さを増し、毎回遅くまで、活発な意見が交わされた。二〇二三年四月になって、六角氏と深くかわる、永源寺文書の調査を開始したのも、まさに自然の流れとしてそうだったからである。爾来、栗東歴史民俗博物館では、計六回にわたる撮影調査を実施した。

ただし、こうした濃密なテキストの読解、綿密な原典調査から生まれた研究成果は、今後学術雑誌を通じて、参加者各人によって展開されることが望ましい、というのが、私の基本的な考えである。本特集はむしろ、式目読解や史料調査の基礎作業に取り組む中から生じた、(各人の研究テーマに必ずしも直結するわけではない)「発見」を公表する

場であり、また当該テーマと史料群に関心を持つ研究者に向けて、大小の新情報の提供に徹すること、を目的としている。

史料調査を通じて、既存の史料目録を刷新する必要を痛感することとなったため、目録にも多くのページを割くこととした。分載初回の本号では、永源寺文書のうち、「長櫃中世文書」と称される函に収められた文書を素材とした、三点の研究ノートと一点の史料紹介を掲載している。濱野論文は『戦国遺文 佐々木六角氏編』の人名比定が初版とオンデマンド版とで大きく変更された、ある一文書を掘り下げ、そこに登場する「新式目」が、「いわゆる六角氏式目」を指すのか、永禄二年の「プロト式目」を指すのか、という問いに肉薄する。つづく森下論文と佐野論文は、いずれも末寺から永源寺に入った文書に着目して、未知の事象に迫る点で共通する。森下論文は、北条家朱印状写を新たに発見し、既知の写よりも良質であることから、岩櫃城成立期の従来説に変更を迫る。佐野論文は、大慈寺の永源寺末寺化にかかわる、寛文・延宝年間の相論関係文書を丁寧に解きほぐし、中世文書として目録化されてきた文書が、近世の相論に伴い、どのように収集されたか、を問う。米田論文は、「売券」とは異なる「伏状」なる新奇な様式の文書を発見し、その相違点や文書作成背景を掘り下げたノートであり、本人曰く、史料紹介である。

この小特集が、諸研究の進展に資するところがあれば、幸いである。末尾ながら、臨済宗永源寺派大本山永源寺、とりわけ同寺の森慈尋氏、また栗東歴史民俗博物館には、大変お世話になった。ここに記して、深甚の謝意を表する。